

---

# A book worm

松本 和

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

A b o o k   w o r m

### 【Nコード】

N 1 6 7 9 C

### 【作者名】

松 本   和

### 【あらすじ】

本が好きで、いつも本の中の世界にのめり込んでしまう私。そんな私が今回にしたのは、鬱病患者が主人公の本だった。

## 第1話

みんなにも経験があることだと思うけど、私がきつと一番だと思う。

本を読むと自分もその世界に入り込んだかのような錯覚に陥る。面白ければ面白いほど、深くリアルな世界へと引きずり込まれる。

…私は誰よりも、その架空の世界に入り込みやすかったのだ。

私は小さい頃から本がすきだった。book worm。よくそう呼ばれていた。

その日、私は高校の図書室で一冊の本を手にとった。題名は『A mental illness』つまり『精神病』という意味だ。

私はページをパラパラとめくってみた。どうやら、一人の精神病患者とその治療にあたった医師の話らしい。

そこまで厚いものでもないし、今までに読んだことのないジャンルのものだったので、私はそれをかりることにした。

家に帰ってさっそくその本を読んでみた。予想通り、その話の内容は少し難しかったが、私はいつものようにその本の世界に引きずり込まれた。

私は本の中で、精神病患者のポジションにいた。この本は、まず普通の生活を行っていた頃の患者の話から始まった。私も本の中で患者と同じ生活をしていた。

その患者は男性で、最初はみんなと同じように会社に行って働いていた。有能で期待もされていた。明るい性格で同僚に好かれていた。しかし、そんな彼がしだいに鬱状態になっていく。

その理由は上司のいびりだった。やたらと仕事にいちやもんをつけたり、雑用はすべて彼にやらせたりと、なかなかひどいものだった。

はじめは怒られたら落ち込む程度だった。それがしだいに悪化し、ふさぎこむようになり鬱状態となった。

しばらくして、彼は仕事を辞めた。それも悪かった。彼は自分の無力さ、期待を果たせなかったことへのうしろめたさからどんどんと悪い方向へ進んでいった。

それで、彼は友人の勧めもあり精神科へ通うこととなったのだ。

「夕飯よー！降りてきなさい！」母が呼ぶ声で、私は本の中から引き戻された。

続きが気になったが仕方がなかった。ご飯を食べてすぐ読むことにした。

ご飯を食べている間（本を読んですぐはいつもこんなものなのだが

…）私は読み途中の本の中の患者のようにふさぎ込んでいた。

母にどうかしたのか。と尋ねられたがいちいち説明するのも面倒だったので、なんでもないので返事をした。

急いでご飯を食べて、私は再び本を手にとった。  
早く続きが読みたかった。

「あなたは躁鬱病ですね。」

「躁鬱病…ですか？」

彼は聞き慣れない病名を医師に聞き返した。

「あなたの場合は心理的負担が原因でしょう。」

…躁鬱病というよりも双極性障害…という呼び方の方が多いですが、気分が高まったり、沈んだりと両方をもつ気分障害のことです。

治療は薬物治療・心理治療です。薬物とは気分安定薬ですね。」

医師は一気に話し終わると今日渡す分の薬の説明をしたら。

薬を受け取って彼は家に帰った。一人暮らしなので待つものなどいかなかった。今日のことを親に話すべきか悩んでいた。自分が鬱病だということ、恥ずかしくて仕方がなかった。

……気が付けばもう夜の12時回っていた。寝なければ明日苦労するだろう。私は本を閉じて寝ることにした。

しかし先程の彼の悩みが、まるで自分の悩みのように頭の中でめぐるっていて、なかなか寝付けなかった。

## 第2話

朝おきて、学校に行きたくないと思っている自分がいた。  
やる気がでなくて、布団の中でうずくまっていた。  
何もしたくなくと、しなくてもいいと考えていた。

ふと、枕元にある本に気付いた。：そうか。私はまた本の中の人物の心情を引きずってしまっていたのか。

ここでやっとそのことに気付く。すると少しやる気がでてきた。いつものことだった。本の中の彼のようにふさぎ込んでいたのだ。

それがわかった私はのろろと学校へ行くための支度をはじめた。  
ただ、完璧に彼から抜け出すことはできなかった。

そのため学校でも、やる気がでなく、元気がないと何度も言われた。  
私もうんざりしていた。早くこの状態から抜け出したい。

そのためには、彼が元気にならなければならない。  
つまり、早く本を読まなくてはいけないのだ。彼の病気が治れば私のこの気分も晴れ晴れとするだろう。

授業と授業の間にさえ本を読むことに撤した。もちろん昼休みもだ  
：。

お母さんには話さない。一晩中悩んで、彼はその結論にいたった。会社もやめてそのうえ鬱病だなんて、自分を応援してくれている母に言うことなどできなかった。

結果、彼は一人で鬱と戦うことになった。病院に通い、薬を飲み、部屋でじっとしている。カウンセリングを受けて、軽い運動をして、ボーッと一日を過ごす。

何もすることがない。したいこともない。笑うことも、話すことも、遊ぶこともなく一日一日は過ぎ去っていくのだ。

しかし、それが悪いという意識がないので、病気は治るところか日に日に悪化していった。

ふいにページをめくる手をとめた。

寒気がした。……もしも、もしも彼がこのまま病気が治らないままだとしたら？……最悪の場合、死んでしまうとしたら？私はどうなるのだろうか。

そんなこといままでに考えたこともなかった。主人公が死ぬという本に出会ったことはない。

どうなるかわからない。

…こわい。こわい。読みたくない。彼は死ぬかもしれない。死ぬかもしれない。

…死なないかもしれない。その可能性だってある。彼が死ぬとはどこにも書いてなかった。まだ希望はあるのだ。彼が治れば私もいまのすつきりしない状態から抜け出せる。

大丈夫。死ぬはずはない。

私は一刻も早くこの本を読みおわりたかった。そうして次は明るい話を読んで、こんな話はすぐに忘れてしまえばいい……。

### 第3話

「すみません。…今日も行けません。明日は、明日は行きますから。」  
「受話器を持つ彼の手はひどく震えていた。」

「そう言つて昨日も来なかったじゃないですか。」  
病院の受け付けの言葉をさえぎり、電話をきつた。

ついに、病院に行くのさえまならない。彼は大きくため息をつき、  
布団に寝転がった。

昨日と…いや、もう一週間近くこんな生活が続いているようだ。医師の話では一カ月彼は病院に来なかったとある。

もちろん患者が病院に来なかった間のことなんて『彼』以外詳しいことはわからないのだ。

そのため、話は一カ月後に飛んでいた。

——一カ月後。

患者さんがやっと病院に訪れた。医師はどうして彼が病院に来なかったのか、理由を尋ねた。

「お久しぶりですね。…どうしてたんですか？」

「ずっと、家にいました。」

「ずっと…ですか？」

「必要なとき以外は…。」医師は腕を組んで考える素振りをみせる。  
「今日はどうして来ようと思ったんですか？」

「…なんとなく、です。たまには、いいかな…と。薬もきれていた  
んで。」

薬がきれていなければ、彼は今日ここにきていなかっただろう。もう自分ではどうしようもなく、自分に鞭打ちながらここまで来たのだ。

「薬ですね。出します。…最近はどうですか？何か変わったことはありますか？」

「いえ。何も。何も変わりません。いつもと同じです。変わらず…  
平凡で。それで。」

そこまで言って彼は黙り込んだ。医師はそのことを深く追求せず、  
そうですか。それはよかった。と言って診察を終えた。

このとき。医師は診察をしていて感じた不安を診察書に書き留めて  
いた。

彼は今危ない状態。精神が非常に不安定で、何も変わりのない平凡

な毎日を生きることに、不満を感じているかも知れない。  
……と。

この医師の判断で、彼は薬をもらうときに、「明日また病院に来てカウンセリングを受けてください。」と言われた。

また明日も病院に来なければならない。それは彼にとって面倒なことの上なかった。

……。

死ぬはずがない。そう信じて読んでいたけれど、彼は医師に危険な状態にあると言われている。

このまま死んでしまうのか？…続きが気になり、私はまた本の中の世界に入り込んだ。

## 最終話

医者にはまた来るように言われたが、彼は次の日病院に行かなかったらしい。

まだまだつづきそうな雰囲気のまま物語は次の章に突入した。

「その後、彼は一度も病院にこなかったんですよ。」「…とそのセリフから新しい章は始まった。

私はいきなりの展開に驚きを隠せなかった。その一言は、彼が死んだことを表していたからだ。

どうやら彼の担当だった医者と他の医者との会話らしい。

「よくあるパターンですな。」医者なのだから、もう慣れたものなのだろう。

「いつ…なくなっただんですか？」それでもよくあるパターンだからこそしりたかったようだ。

「久しぶりに病院に来てから、一週間後ですよ。ちゃんと病院に来てくれればよかったのに。」

「まあ…それすら困難だったんでしょう。」  
それからしばらく2人の会話はつづいていく…そして…。

「彼を発見したのは、連絡がつかなかったから様子を見にきた母親だったらしい。電話に出なかったから不安になったそうだ。」

家族だから合鍵を持っていたんだろう。インターホンをいくら鳴らしても出ないから、勝手に入ったんだ。

そしたら…リビングに彼がいたらしい。首をつるでもなく、リストカットをするでもなく…ただ座っていた。だから最初は死んでいるなんて思いもしなかったそうだ。

近づいてよく見てみると、彼は呼吸をしていなかったし…もうかなり…腐っていたらしいんだ。

死んだのは一カ月前だったって話だ。」

………部屋のドアがノックされている。きつとお母さんだ。それはどんどん強くなる。私の名前を呼んでいる。

返事をしなくちゃ。　　いるよ。どうしたの？なんでそんなに慌ててるの？………なんでドアを壊そうとしてるの？

私の声が聞こえてないの？お母さん………ほら、わかったでしょ？私生きてるでしょ？座ってるだけじゃない。

そんな悲しそうな顔をしないで……泣かないで！

私はまた生きてるでしょ？

お母さんの叫び声が聞こえる。どうやら私の声は聞こえていないらしい。

……そうか。私は死んでしまったんだ。精神がおかしくな  
ってしまっ  
たんだ。そう……ちよ  
うど、彼のよう  
に。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1679c/>

---

A book worm

2010年10月14日16時58分発行